慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	聖徳大学所蔵『七夕』翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2010
Jtitle	三田國文 No.52 (2010. 12) ,p.40- 48
JaLC DOI	10.14991/002.20101200-0040
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20101200-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖徳大学所蔵『七夕』翻刻

辻　英子

仮題「七夕」、絵巻二軸。上巻　縦三二・九×横一四七〇・二糎。下巻　縦三二・九×横一三三六・六糎。上巻絵七図、下巻　絵六図、計十三図。表紙は朽葉色に金・紫で亀甲文をうかせ織りにした綺、紫色の平打紐を付す。見返しは金紙。料紙、鳥の子、金箔を散らす。題簽はない。書名を「たなばた」「七夕の本地」「天稚彦草子」「雨わかみこ」などと称する七夕の由来に関する伝本が多い中、本作品の詞書は、静嘉堂文庫蔵『七夕もの語』（題簽）（室町時代物語大成八　所収）に近い。上・下を二度に分載する。

聖徳大学所蔵『七夕』詞書

（上）

それ我てうは神代よりはしまりしんむ
てんわうを人わうのはしめとして
国土のはんみんみなこのすゑにつゝけり
されは神国なれはかりに人けんとむま
れ給ふといへとも又神とけんししよ人
のわさはひにかはり給ふ事ありかたき
御ちかひなりしかるにてんにまし〳〵て
ふうふのちきりをふかくまもらせ給ふ七
夕のゆらひをくはしくたつぬるに神
武天皇より三代の御かとの御宇にあた
つて長者一人あり女君を三人まうけ
かしつきそたてけるさなから人けんのた
ねともおほえすようかんのうるはしき事
天女のけかいにしやうし給ふかとそ見え
たりけるあね二人はとしもはやはたち
のあとさきにをよへりされともたかきは
をそれあり又くたれるはほいなしとて
さたむへきつまもなしいもうとは年い
またわかけれはなをしおもひこめたる事
もなく三人なからふかきまとのうちに
やしなひたてゝいたつらに世の人にま
みえむことをいとひしかいもふとはこと

（第1紙）

にいろこのみふかく常のことわさにもい
ひたはふれけるそれ人のちきりをきく
におもふにはわかれおもはぬにもそふなら
ひさらにこゝろへかたしたま〳〵あひお
もふ中はいつしかさためなき世のならひ
しやうしやひつすいのことはりをのかれす
さきたつもこゝろうし又をくれてひと
り物おもはんもなをかなしされはとて
ふたりのおつとにまみえむことまことの
人とはいひかたしたゝよろつよまても
かはらぬちきりこそあらまほしけれと明
くれねかふといへともそのかひあるへきにあ　（第2紙）
らすこゝろにまかせすとし月をそおく
りける其比天たうにやかなひけんふしき
成事こそいてきたれあるとき長者のまへ
なる川に出てめしつかひける女物をあら
ひけるになにとなきいつくしきくち
なはいてゝほそきこはねをあけて云
やうわかたのむ事かなへむやといふ
おんなこはそもおそろしやくちなは
の身として人のことく物いふ事あるへき
ことならねはとかうの返事もせてはし
りのかんとせしときかのくちなはけし
きかはりてうろこさかさまになりまな
こを見ひらきすてにとひかゝらんいきほ
ひ見えけれはをそろしなからのかれぬ事
とおもひ又たちかへりいとやすき事に
て侍るそや身つからこゝろにをよふほ
との事はかなへてまいらせんといひけれは
くちなはうれしけにてくちのうちより
いつくしきたまつさをはきいたしこの
文長ちやにみせよといふ女いよ〳〵おそ
ろしくこゝろへぬことなりとおもひけれ　（第3紙）
ともたまつさをうけとりていそきはし
りかへりしか〳〵とてまいらせぬ御そはち
かき女はうけとりて長者にたてま
つりけるによりて此文をみるにけにも
もしのあさやかなる事まことに人けんの
手つさみともみえすをしひらきはい
けんしけれはその文にいはくむすめ三人
のうちわれにこゝろさしふかゝらんを一人ゑ
させよしからはいよ〳〵家とみさかへ行
するなをもめてたかるへしもしまた
こくうの事とおもひこの事いなとな
らは七代まてその家をほろほしたち
まちめのまへにてうき事をはやく見
すへし川はたに十四けん四めんのつ
り殿をたてよの人ひとりもをかす
ひめ一人をそなへよ
あなかしこと

かきとめ

たり　（第4紙）

〔絵一〕（第5紙）

長しやこれを見てこはそもいかゝせん
さらにまことゝおもはれすとてかの女に
くはしくたつねければいつはりならぬ
よしいろかはりて申ければたゝあきれ
かなしむ事かきりなし父母さしつと
ひてたとひみかとのせんしなりとも心
にかなはぬ事をそむきたてまつるは
つねのならひこれは行ゑもなき物に
おもひこめられてとかくいふにをよひ
かたしまつ事のよしをとふてこそは
からはめとてむすめ三人をよひてしか
〳〵と聞えければ一のひめこのよしきゝ
てうらめしき仰かなたとひめのまへ
にてうき事あれはとていかてかしや
しんに身をまかせんこの事かなふへき
ともおほえすとて身をわな〳〵とふる
ひきえ入こゝちしてきぬひきかつきお
もひもよらすとてなきにけりさらは中
ののひめはいかにとのたまへはわれもかくこそ
おもふとてすゝむけしきもなかりけり　（第6紙）
ちゝはゝもことはりとおもひ給へはたゝもろ
ともにいのちをうしなふへきなりとてかさ
ねてとふにをよはすなくよりほかの事
そなきいもうとの君つく〳〵ときゝて
さのみなけかせたまひそよそれ人のな
らひけふはたのしみさかへあすはまたを
とろへあしたにむまれ夕辺にしすい
のちのきはさためかたし我いたつらに
くちなんいのちを父母のしそんのため
にうしなはんになにのうらみかのこるへし
みつからとかくいふならはいまゝてさかへし
人々もみなをとろへはてゝおもはさるに
父母はらからともにこゝかしこにまとはん
事うたかふへきにあらすそのときは
くゆるともかひあらし身つからこそま
いらんとおもひ入たるありさまなり父母と
もにあはれとおほしめしけれはとかくの
事ものたまはすたゝなみたにこそは
むせひけれことはりなるかな此姫はすかた
かたちの二人のあねにこえたくひなき
のみならすこゝろさまのかしこき事は　（第7紙）
一をきゝては十をさとりしいかくわんけ
むのみちをたしなみあけくれ佛のみ
ちにさへこゝろをいれかう〳〵をもとゝせり
かゝるいとをしきひめをめのまへにて
うしなはん事たとひわか身はほろふと
もこのひめをそなへむ事おもひもよ

らすといひもはてぬにいつくともなく
なかひつ一えたもちきたりひろには
にかしこまり物申さんといふおとひめ
まうけの人々あやしくおもひいつくよ
りの御つかひとて出あひけれはための
御つかひなりとてかきいれたり長者
このよし聞よりもさてはしんつうしさ
いにてこの事をはやしりたるらんな
けくにかひなき事なりとて
ひめきみの出
たちをこそ
いとなみ
たまひ
けり（第8紙）

〔絵二〕（第9紙）

扨あるへきことならねはあまたのはん
しやうをあつめて時刻をうつさすかの
川はたに十四けん四めんのつり殿をた
ておとひめに十二ひとへをきせまゆの
けはひうつくしくさしきにそなへた
てまつり一もんけんそくもなこりをしみ
てあひかまへてかゝるうきめにあふ事
もせんせのなすところなりこゝろをく
れたまふなよたゝ佛の御名をとなへ後
の世をねかふへしする露もとのしつく
となる事もをくれさきたつためし
なりつゐにはおなしはちすをまつへき
そやさのみなかゐしてうき事やあ
らんすらんとてなさけなくもひめきみ
をふりすてゝ母きやうたいもろともにた
ちかへらんとし給へはひめ君あまりのこゝろ
ほそさにしはしとゝまり給へかしわれい
かなるしゆくえんにてかりにおや子と生
れいてかゝるうきめを見せたてまつる事
かう〳〵のそのひとつとならん事こそよみ（第10紙）
ちのさはりともなりぬへしこれをほ
たひのたねとしてこしやうをねかひ給へ
親子は一世と聞なれ共佛のめくみあるな
らは又もやめくりあふへきなりされはつ
たへきくしつた太子はなん天竺のあるし
しやうほんわうの御子としてあめか下
の事こゝろにかなはすといふ事なしさ
れとも母をたすけんためしんみやう
をおします身をいやしきものとなし
水をくみたきゝこりて仙人につかへ
十二年の後つゐにしやかむに佛となり
たまひしゝたる母にあひ二たひ父に
あひたまふことこれかう〳〵のゆへそかし
みつからもおやのためかくなり行こと今一
たひのなけき又一たひのよろこひとや

なるへしとさもおとなしくはのたまへ共
なみたはすゝむはかりなり姫君おもひつゝ
けて
一世たにちきりもはてぬたらちねの
なみたのたねにさきたつそうき
とかく時うつりけれはやう〳〵ねの刻はかり
になりぬ今はこれまてといひもはてぬに
川なみしきりにたつてさやかなる月に
はかにかきくもり神なりさはきいなひ
かりして雨しやちくのことし人々をしき
なこりもうちわすれわれさきにとこそかへ
りけり其後川中よりひかり出ひるのこと
くにかゝやきなみのうちよりたけ十ちや
うはかりなる大くちなは出てすこしも
ためらはすひめ君の御まへにかうへをう
なたれしたをいたしいきつきけるあり
さままなこはあさ日の山のはよりいて
けるにありあけにしにかたふきてひ
かりをあらそふことくなりされとも姫君は
おもひまうけたる事なれはすこしもお
とろき給はすなんしこゝろあらはしはら
く物をきけみつから父母にかしつかれ
人にたにたやすくまみへんことをいとひ
しにいかなれはちやしんの身として思ひ
かけゝるこそふしきなれさてなにのさ

（第11紙）

まにゝて我をは恋けんすみやかにさんけ
してとくうしなへとのたまへはくちなは
いふやうわれになおそれたまひそこれも
しゆくこうふかきゆへなりねかはくは我かう
へをたちわりてたひ給へまことのす
かたをあらはさんといひけれはその時ひめ
君まもりかたなをとりいたしかうへを二
つにきりたまへはいきやうくんしてひ
かりかゝやくと見えしかいくわんたゝし
くしたる雲の上人出たまふひめ君か
ほふりあけて見たまふにこの世ならぬ
ふせひなれはいつしかおそろしかりし
こともわすれはてれんほのおもひを
なし給う

（第12紙）

（第13紙）

〔絵三〕

（第14紙）

かくてくちなはゝ又川なみにしつみけれ
は雲の上人はつりとにとゝまりてかた
らひふし給ふよるのおとゝには十四けん
のかりやすなはちくうてんろうかく
となり七ちんまんほうみち〳〵てさな
からせいりやうしゝんてんのたのしみを
えたまふいつくよりかきたりけん天女
のことくなる女はうあまたひめ君にみや
つかへたてまつるなに事も心にかな
はすといふ事なしひよくれんりのち

きりをこめかたときもたちはなれ
たまはすあるときひめ君のたまふ様
御身はいかなる人なれはかくあり給ふそ
やつゝますかたらせたまへときこゆれは
今はなにをかつゝむへき我はこれ天上に
すむあめわかみことといふものなりされ
はこゝろさしのせつなる事にひかれて
かりに人けんかいにくたりおほえすち
きりをこめ侍る事あさからぬためし
なりされはいつまてかつたなき国に　（第15紙）
すむへきにもあらす今は天上にかへ
らんとおもふなりいま七日すきは又ま
いりあふへきなりこれこそわれか
たみにのこすとていつくしきかろう
とひとつとりいたしかまへてこのふたあ
けたまふなよもしこのふたひらき給
はゝひきやうしさいの雲たえて二たひ
くたる事あるへからすちきりふかくま
しまさはあまちはるかにたつねた
まへとてたちわかれんとしたまへは姫
君こはなさけなきおほせかな千代
もかはらしとこそおもひしにあさは
かなしさゝめことうらみてもあまり
ありとて御たもとにすかりつきなみ
たをなかしたまへはいやとよこゝろのかは
るにはあらすまたともなひかへるみち
にてもなし御をしはかりもあるへし
とてたち出たまふと見えしかは川の
おもてにしうんたつて天人をんかくを
そうし御むかへにてこくうにあからせ
たまひけり　（第16紙）
〔絵四〕　（第17紙）
さるほとに長しやふうふはかゝる事とは
夢にもしらて今ははやひめきみむなし
くなりぬらんしやしんにとられてい
つくへかまよひけんとなきあかした
まへは二人のむすめもともになみたを
なかしけるかこゝにてなけかせ給ふ
ともかひあるへき事ならねは身つから
かの川はたにまいりいかに成たまふを
見てこそまいらめとて夜の明くるを
まちいそきくるまをとゝろかし二人
もろともにありしところへゆき給へは庭
には金銀のいさこをしきしつほう
をちりはめくうてんろうかく玉の
きさはしさなからこくらくしやうと
もかくやとおほえてこはいかに夢に
道行こゝちしてうつゝとはおほえ
す車をさしよせ給へはひめ君は女御
かうゐのことくにてあまたのうへわら

はにかしつきかれたゝうちおしほれて
ものおもひたるふせひなり二人の人々　（第18紙）
うれしきにもなみたさきたつてありし
うき事ともをかたりなくさみ給ふひめ
君はわかれしすかたの身にそひてつや〳〵
物ものたまはねは二人の人々かやうにめ
てたきさいわひのうへなにかおもひのまし
ますそやうら山しのひめきみやわれ〳〵
こそあねなれはこのさひはひにあふへき
ものをとねたむこゝろもおほかりけ
りこゝにまたうつくしきはこひとつ
あり此うちこそゆかしけれとてふたをあ
けんとし給へはひめきみそれこそいみ
ふかきはこなれはたやすくあけん事
こそおそれなれとてしは〳〵とゝめ給
へともなにのさはりかあるへきいかは
かりうつくしき物の入たるらんとてふ
たをあけて見てあれはらんしやのに
ほひのみかうはしくしていりたるも
のはなかりけりさらはとくふたをしたま
へとありけれともそこをはらひて見た
まへはうちよりうす雲たちのほりこくう
へあかると見えけれはくうてんろうかく　（第19紙）
もみなもとのことくのつりとなり
せいしくわんちよもきえうせて

夢のさめたる
ことくにて
夜はほの〳〵
とそあけに
けり　（第20紙）

〔絵五〕（第21紙）

いたはしや姫君はたゝはうせんとあきれ
はていまゝてまたくる七日をまちける
になさけなくもひきやうのくもりき
えさせたまふかなしさよけにやろせ
いかみし五十年の夢のたのしみたゝ
一ねふりのうちそかしこれ人けんのう
ゐむしやうをしめし給はん佛のはうへん
とおほえたりかゝるはかなきうき世に
なからへなにをたのしひなにをうれふ
へきやこんくしやうとのいとなみこそま
ことのみちともなるへきとおもひさため
てまし〳〵けれは二人のあね君御らん
していかなれはふしきにめてたき御
いのちなからへうらみかほに見えたまふ
そや父母のおもひにしつみてましませは
とくかへらせ給ひてみゝえんとはますひ
め君をいたきくるまにたすけのせた
てまつり父母のまへにまいり給ふされ
はうらしまか七せのまこにあふたる心

ちしてこよひ一夜はちよをあかすより　（第22紙）
もなかゝりけりとていたきつきて
よろこひたまひいかに〳〵との給へとも
たゝうちしほれておはしけりその日も
やう〳〵暮ければひめ君はひとまところ
に引こもりきぬひきかつきてふし給へ
ともいをねもこゝろにいらされはありし
夢人の御おもかけの身にそひて心
もそらにあくかれたえてなからふへ
きならねはよしいつはりなりとも仰
にまかせてたつね見はやとおほしめし
父にもはゝにもしらせ給はすつねの
すみかをたち出たまふかいかになけか
せたまはんとおもふにつけて一しゆの哥
をよみをきたまふ
　おもひきやうき玉のををなからへて
　むすほゝれぬるなけきせんとは
かやうにかきとゝめきちやうにむすひつ
けてそゝろにうかれ出たまひかの川の
ほとりにたゝすみたまふにみきはの松
は物さひしくよせくるなみもをとす
ことくいつくをそこともおほえぬに川　（第23紙）
上にあたりてともし火のかすかに見え
けれはそれをたよりにたゝひとりたと
る〳〵とゆき給ふ夕かほの花さきみ
たれいろかほもえならす見えけれは
しはしたちよりたまひて
　ちきりしはいかにむなしきことのはの
　花なつかしき君のゆふかほ
とうちなかめ給へはそことなくけふり
一むらたちのほるを見たまひて
　君かすむあまちときけはなつかしや
　けふりとなりてあふよしもかな
とてそらをのみなかめてをはしけれ
はかのけふり姫君のまへにちかつきを
のつからこくうにあからせ給ふさてはは
ちきりたえせぬ物かはとたのもしく
こそおほしけれおりふししつのめとも
たゝすみてありけるかこれをみて
天人のあまくたりたゝ今てんしやう
にあからせたまふことのありかたさよ
とてあやめもしらすまほりゐけり　（第24紙）
〔絵六〕　（第25紙）
さるとにやう〳〵けふりあつくたちの
ほりむらさきの雲となり天路はる
〳〵と行ほとに人かいもはやとをくな
りぬれは雲一むらのうちひかりさし
てかふりきたる人一人ありさてはや
てんしやうなるらんとうれしくおほし
めしかの雲にのりうつりあめわかみこ

の行ゑやしろしめしけんととひ給へは
こたへていはくこゝはまた人界にちかき
ところなれはさやうの人はいま一天のうへ
にこそおはすなれ我は夕みやうしやう
とてよひに世界をてらすほしなり
とて雲にのほりてすき給ふ又雲に
うつりてしか〳〵ととひ給へはこれはほ
うきほしとて世のわさはひをしめし
しゆしやうのきつけうをしるほしなれは
みな人あくしやうとて常はかくれ侍るなり
いかてかあめわかみこのおはします天へ
はいたらんとてうちとをりぬさてまた
そこをすきて雲のうちそこはかとなく（第26紙）
ひかりけれはこれなん君のめされけんとの
りうつり見たまふにいつくしきてんとう
し七人のりたまふ此人々にあめわかみ
こやましますらんとのたまへはわれ〳〵は
是すまるほしとてかやうになみゐてひ
とりもかけてはかなはぬ身なれは外の
雲にのる事なし今一天のうへにこそ
ありかたき人はおはしけるとて行すき
ぬ姫君あらあさましやみつから人けん
の身としてやことなき雲の上人に
夢のちきりをこめなからその名残を
わすれかねしたひたてまつるともい
かて二たひま見えおはしまさんとな
みたとともにうかれ給ふまたたまのこし
にのりたるとうしにあひたまひあめ
わかみこのありかをしろしめされて
さふらはゝみつからのをしへてたへとて
なき給ふあらいたはしやこれより水
の天をこえこん〳〵るりの地に玉をみか
きにしきをかさりたる所こそみこのすみ
給ふ天上なりとをしへたまふ（第27紙）
〔絵七〕（第28紙）
姫君なのめならすおほしめし御身い
かなる人なれは我をあはれみてかやう
にをしへたまふそやわれはこれあかつ
きのみやうしやうとて五かうの天にを
よふとき日かけにさきたつて三かい
をてらすほしなり御身わかためにに
あかつきことのつとめおこたらすいの
り給ひしこゝろさしいま又そのほう
をんにをしへ侍るなりとてなをね
むころにかたり給ふそありかたき（第29紙）

（付記）
本稿は平成22～24年度科学研究費補助金（課題番号 22520192）
による研究成果の一部である。